

「カラマーゾフの兄弟」論（6）—〈賢い精霊〉を見据えて

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦野, 一宏, HATANO メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0000000076

Copyright © JAPAN COAST GUARD ACADEMY
2018

【論 文】

「カラマゾフの兄弟」論（6）

— <賢い精霊>を見据えて

О романе "Братья Карамазовы"(6)

: размышление о "умном духе"

秦 野 一 宏

【論文】

『カラマーゾフの兄弟』論 (6) — <賢い精霊>を見据えて

秦野 一宏

1.

ドストエフスキイは人間を信頼していたかもしれない。しかし、彼が「常に、レーベジェフも、ロゴージンも、おそらくエパンチン将軍でさえ、いつかはゾシマになるという希望をもっている」と、断言するのはどうだろう。いくらなんでも甘すぎやしないか。ゾシマ長老がドストエフスキイの考える人間の理想形の一つにちがいないし、また人間はどう変わるかもわからない。だからといって、誰もがゾシマになれるとドストエフスキイが思っていたどうかはわからない。たとえば『カラマーゾフの兄弟』で言えば、修道僧見習いのラキーチンはまずもって、聖者ゾシマになる道は閉ざされているのではないか。この男は、ドミートリイに対して行った長老の「拝跪」を「いつものこけおどし」だ、「手品」だときき下ろしておきながら、長老が死ぬと、彼の伝記を何食わぬ顔で出版する、そんな輩である。

伝記の冒頭を飾る、長老への「敬虔なみごとな」献辞はまさに、ゾシマを敬愛する信者たちに本を売りつけるための巧妙な策略でしかない。なにより怪しげなのは、ラキーチンが弁護士フェチュコーヴィチの「たいへん感銘深く拝読した」との読後の感想を述べた言葉に、狼狽の色を隠せないことだ。「『印刷するために書いたわけではないんです……。それがあとで公になってしまって』とラキーチンは突然何かあわてたように、ほとんど羞恥すら示してつぶやいた²⁾。厚顔無恥なこの男が妙に羞恥を示すのは、そこに、自身の利益のからんだ汚らわしい嘘がかかっているからではないのか。どのような方法を使ったのかはわからないが、アリョーシャの編纂したものを無断で転用した可能性すらある。「深い宗教的な思想に満ち」としていると弁護士が礼讃したこの伝記『身罷りしゾシマ長老の生涯』は、アリョーシャの編纂したノート「身罷りし司祭スヒマ僧ゾシマ長老の生涯よ

り」と、なにやら題名もよく似ている³⁾。

ラキーチンは全体として戯画的な描かれ方をしているためか、副次的人物、「リベラリストをよそおった鈍物」として扱われ、これまであまり重要視されてこなかった。しかし、小説の中で彼の果たす役割は決して小さくはない。この男は、長老の遺体が腐臭を放ったことで落ち込んでいるアリョーシャを見て、好機到来とばかり、「売春婦」と自身、レッテル張りをしたグルーシェンカのもとに彼を連れて行き、道を踏みはずさせようとした。またその誘惑行為によってグルーシェンカからも 25 ルーブルをせしめようとした。そしてその金でアリョーシャを売ったことがばれると、今度はひらきなおって、「君はキリストじゃないし、俺もユダじゃない」と悪態をつく。たしかに彼はユダのように自殺なんかする手合いではない。もともと彼はアリョーシャも認める友人であったのだが、のちにはその関係も破綻し、アリョーシャ自身の口から、「彼は友だちではありません」と縁切りの言葉が飛び出すまでになる。このように、キリストの面影を宿した柔和なアリョーシャに突き放されると、その者はなにかしら、キリストに敵対する悪魔に見えてくる。

利にはしこいラキーチンは<観察力>に長けている。常に情報源を確保し、耳をそばだて、得をすることはないかと周囲を見回している。ホフラコワ夫人の資産 15 万ルーブルを当て込み、彼女の痛む「あんよ」を詩にして送ったりしてご機嫌をとったのも彼だ。彼はアリョーシャだけでなくイワン、ドミートリイにも近づき、その交わりによって得られた情報を歪めて使い、フォードル殺人事件を売れ筋の読み物にすることをもくろんでいる。

何百人の傍聴人の気持をラキーチンはあやつることができる。語り手は、大衆迎合的な美文をまきちらしたラキーチンの陳述を揶揄して、「思想の独立性と、その飛躍ぶりの並外れた高尚さで、傍聴人を夢中にさせた」と言う。ドミートリイは、「この問題を解決するには、自己の人格を自己の現実と対置することが必要である」というラキーチンの言葉を取り上げて、「知的」であるけれど、「わけがわからず、あいまいだ」と評しているが、こうした文章の奇天烈さが、大衆好みの「思想の独立性と、その飛躍ぶりの高

尚さ」を生み出すことは疑いない。

ドストエフスキイは、カラマーゾフ的なるものを考えるには、カラマーゾフ的なるものとよく似た、それでいてまったく非なるもの様々な対比が不可欠だと考えていた。その対比の役割を果たすのがたとえばラキーチンたちである。ラキーチンたちが撒き散らすラキーチン的なるものがくカラマーゾフ的なるもの>の輪郭を明確にする。

カラマーゾフ的なるものとは一面から見れば、下劣で好色的であるところを求められよう。しかし、下劣で好色的なのは何も、カラマーゾフの兄弟たちに限ったことではない。たとえば表立ってはそのそぶりさえ見せないが、ラキーチンだってよからぬ遊びが大好きなようである。彼はふつうに生活してゆくだけの金は十分にもっていたにもかかわらず、「いとこ」のよしみとでも思っていたのか、グルーシェンカのもとにいつも金をせびりに来て、月に30ルーブルぐらいつつ持って行くこともまれではなかった。その金はグルーシェンカによれば、たいいてい「よからぬこと *баловство*」に使っていたらしい。刑務所に収監されているドミートリイにまで金を借りていたというのだから、ラキーチンの遊び方も相当なものであったにちがいない。ただ、頭がいいとうぬぼれ、実際に頭の働く彼は、フォードル・カラマーゾフやドミートリイのように自身の女好きをおおびらに公言せず、好色の「虫」を敬虔な見習い僧の仮面の下に隠しつつげている。一方、カラマーゾフたちはラキーチンと違って、好色一辺倒というわけではない。ドミートリイなどはソドムに身を浸そうとする好色家でありながら、その性向はマドンナの美への関心と結びつき、心にはシラーのような理想主義的なものも同居していた。

下卑たラキーチンには、善美に対する希求はけっして内から湧き上がることはない。そもそも彼は、金を借りている相手にも感謝するどころか、見下したような態度をとる。おそらく、彼の意識では、頭のいい人間には人を利用する権利があるとでも思っているのだろう。自分を疑うことのないラキーチンの心は、総じておだやかだ。一方、苦悩を抱え込むカラマーゾフたちの心は常に波打つ。「法が人間から奪われたのに、新しいものがまだ見つからず」、それを見つけようと「あらゆる方向への動きを試みる」時

の「異常、苦悩」、一ローザノフはこんなふう「カラマーゾフ気質」を定義した⁴⁾。加えて言えば、<カラマーゾフ的なもの>とはそこに、矛盾する反対の性格を含みこみ、動的エネルギーを生み出す力、どんな絶望にも屈することのない「狂暴な、ほとんど無作法と言っているくらい

の生への渴望」そのものである。その奔放な力はまさに、カラマーゾフたちの精神を引き裂き、苦しめながら、同時に別の方向に向けて突き動かす力として働く。作品世界では、この<カラマーゾフ的な力>と<ラキーチンの力>が拮抗していると言っても過言ではない。

カラマーゾフ気質に関して、イワンはアリョーシャに「どんなことでも堪えぬける力があるとして」、それは「カラマーゾフの力」、「カラマーゾフの低俗の力」だと言う。しかし、どうにも確信があるわけではないらしい。アリョーシャが「それは放蕩に身を沈めること、退廃の中で魂を押し潰すことですね、そうでしょう？」と問い返すと、答えは「たぶんな」であった。またアリョーシャが、「兄さんの言う『カラマーゾフ流』とは『すべては許される』ということですか」と問いかけると、イワンの答えはまたしても、「たぶんな」である。こうだと断定するのではないのだ。公理はあくまでも、神が存在しないとすればという仮定の下での論理的結論ではあるが、イワン自身は神が存在しないと絶対的な確信あるいは信念を持っているわけではない。「すべては許される」という「バージョン」も「悪くない」、「[公理を] 否定はしない」という一種あいまいな表現の中にイワンのイワンらしさが現れている。一方ラキーチンは、すべては許されているのかというドミートリイの質問に対して、横柄に、いささかも揺らぐことなく、「そんなこともわからないのか」と即答する。ラキーチンたちにとっては、「そんなこと」は当たり前のことなのだ。

退廃の権化のようなフォードルですら、神がありやなしやと煩悶する点において、ラキーチンとは一線を画す。バフチンは、ドストエフスキイの登場人物の多くは、「最高の価値」に係わらないでは生きていけない人間と、自己の生活を、「最高の価値」に対していかなる関係をも結ばずに築き上げようとしている人間に分類できるとした⁵⁾が、もちろん、ラキーチンは「最高の価値」とは縁のない人間である。見習い僧にはなっているが、彼にと

っては神はもとよりアプリオリに存在するものでもないし、また彼には全霊を賭して追求したいと思えるイデーもない。

ラキーチンを我々に身近な凡人とみなす中村健之介の読みは、間違いではないとはいえ、それだけでは物足りない。いったいラキーチンは、どこにでもいる「俗物なりに小才のきく醒めた努力家」なんだろうか⁶⁾。思うに、この「小才」が曲者なのだ。アリョーシャは、自分を俗物だと思っているんだろうというラキーチンの問いかけに、いや、君は「俗物」ではなく、「頭がいい умён」のだと答える。言い得て妙だ。頭がいいと言えば、イワンは幼少より「勉学において一種異常な、輝かしい能力」を示し、「天才的な才能」の持ち主と言われてきたが、このイワンの〈聡明さ〉は、ラキーチンの〈頭のおよさ〉とはまったく質の異なるものである。

そもそもラキーチンの頭は真理あるいは真実といったような、直接、自分の利益にからまぬ問題には関心をもてない。利益抜きでは頭がまったく機能しないのだ。イワンの〈知〉は絶対的な真理を求めてやまないが、ラキーチンの〈知〉は限定的で、同時代に進歩的であると感じられているものしか扱えない。ただ〈進歩的〉と目される流行りのものについては、表面的ではあるにせよ、何でもよく知っている。ドミートリイには、スピノザの「エチカ」、フランスの生理学者「クロード・ベルナール」、神経細胞の樹状突起など、さまざまな現代のエポック・メイキングな話題についての断片的知識を披露した。またコーリヤには、理神論者のヴォルテールやベリンスキイについてあれこれと語っている。それだけではない。同時に彼は、自分の出席できない修道院長主催の食事会にどんな上等の料理が出されたか、その献立のすべてをこと細かく、徹底的に調べ上げてもいる。雑多な教養を寄せ集めるのは、ジャーナリストとして出世するために必要だからで、食事会に出される料理を知ろうとするのは、出世して修道院長になった時の見返りを考えてのことだ。進歩的人間を装うそのあやしげな〈知〉の光の源は、将来の出世というただ一点に絞られるのだ。

ラキーチンは常に周囲の人間を睥睨し、自分だけが特別、頭が良く、他人は皆、頭が悪いと思っている。「ばか者たちがいるおかげで、正直者もたくさんできる。これはラキーチンの考えだ」とドミートリイは言うが、ラ

キーチンからすれば、正直な人間や誠実な人間は要領が悪く、だから頭も悪いということになる。おそらく彼からすれば、ゾシマの話に出てくる「謎の訪問客」ミハイルのように、誰にも知られていない昔の犯罪をわざわざ穿り返して、今の有力者の地位を棒に振るなどというのは、愚の骨頂であろう。

ラキーチンはいつもせせら笑う。悪魔は「大審問官物語」の中で「賢い精霊 умный дух であり、死と破壊の恐ろしい精霊である」と言われているが（第5編第5章）、ラキーチンの笑いには何か悪魔的なものがある。「イワン、スメルジャコフ、フョードル、カテリーナ、スネギリョフも特別、悪魔風に笑うことがある。アリョーシャですら悪魔のしるしがあるのかもしれない」とベルクナップは指摘しているが、恒常的に、無批判にそのような悪魔的な笑いを続けることができるのは、ラキーチンだけである。

スメルジャコフも、自分は「賢い」と信じきっていたが、さすがに彼も、ラキーチンのように、自分がイワン以上に聡明であると考えerほど思いがあってはいなかった。スメルジャコフがお互いの頭のいい人間は違いますね、などとイワン相手に笑って言えるのは、コバンザメのようにく尊敬すべきイワンという大腹にくっついていればこそだ。フョードル殺害も、本人の言う通り、イワンの暗黙の理論指導がなければ、実行はできなかっただろう。ラキーチンは違う。彼は自身の自慢の頭を使って行動する。

ラキーチンがゾシマの伝記やドミートリイ事件についての評論を書いても、それで何かを訴えたいわけではない。彼の目的はペテルブルグで評論家として大成し、社会に影響を与え、人々をリードすること、それに、たんまり金を儲けて豪邸に住み、女遊びにうつつを抜かしたり、極上の料理をたらふく食べたりすることだ。「飽食、放蕩、傲慢、自慢、嫉みぶかい出世競争」と、ゾシマが「酷薄な喜び」と名づけたものこそ、彼の生きる「喜び」そのものである。ラキーチンは自己を強烈に顕示しつつも、抜け目なく生き抜くモンスターであり、『白痴』のガーニャのようなどこにでも見られるくふつうの人>ではない。

ラキーチンは、どんなところでも「コネ」を作り、どんな「隙間」にだつてするする入りこんでくる。たとえばラキーチンはドミートリイの事件

のことで当事者と懇意な間柄になる必要があった。将来何かの役に立つと考えてのことだったのだろう、彼は「〔郡警察〕署長の令嬢の側近の一人」となって、署長の家にも入りびたっていた。刑務所長の家では家庭教師をしていた。だから、彼は例外的な人物として、未決囚のドミートリイと立ち合い人なしでも面会することができた。アリョーシャもラキーチンと同じように面会にあたって便宜を図ってもらっていたが、アリョーシャの場合、それは、ただ彼が署長に好意を持たれていて、刑務所長からも「何か抑えきれない共感」を抱かれていたからだ。同じ結果が得られたとしても、アリョーシャにはラキーチンのような作がない。

ラキーチンはたしかに表の顔だけを見れば、卑近な者、我々に身近な者として現れるが、裏では、肥大した自尊心をもった一種の悪魔の顔を持つ。さえない田舎の紳士のような恰好をして現れるイワンの悪魔は、イワンのイデーをからかい、卑俗化してみせるが、ラキーチンは、大衆の持っている卑俗な考え方を一種戯画的に体現している。ラキーチンの言動は、流行を追いかけ、時事問題をなんでもかんでも見境なく報じる、ごたませのジャーナリズムと重なる。このラキーチンと軽薄なジャーナリズムを結びつけるドストエフスキイの感覚は、どこかしら『友人との往復書簡抜萃』（1847年）を執筆した頃のゴーゴリに似ている。

『往復書簡抜萃』ではゴーゴリは、人間の「魂」と最もかけ離れたところで存在するもの（つまりジャーナリズム）を悪魔の代表とした。当時のゴーゴリがもしも『カラマーゾフの兄弟』を読めば、おそらく、ラキーチンこそ悪魔であると感じとったにちがいない。

ゴーゴリの悪魔は、だれもがその自尊心ゆえに、自分をひとかどの者だと誇り高ぶっている大衆社会と結びつく。「思想も持たず、まっすぐな信念もない、誰も知らない無知蒙昧な人々が聡明な人々の意見や思想を支配し、みんなが嘘ばかりだと認める新聞の紙面が、それに重きをおかない人間の冷酷な立法者となっていくつつある⁸⁾」。—このような傲慢な「知性 yM」（＝「賢い精霊」）が支配した世界は、憂愁に燃え、退屈で、空虚なものになりつつあると、ゴーゴリは認識した。

『カラマーゾフの兄弟』にあっては、自尊心の肥大化はラキーチンだけ

に限られるものではない。ラキーチンの影響を強く受けているコーリヤは、自分が滑稽に見えるのではないか、おかしな人間に見られるのではないかと、いつも気を使っている。興味深いのは、アリョーシャがそのコーリヤの悩みには悪魔が係わっているということだ。「今日では才能あるほとんどすべての人々が滑稽な存在になることをひどく恐れて、そのために不幸でいます。子ども同然の人まで悩みはじめていますからね。ほとんど狂気の沙汰だな。悪魔がそうした自尊心 *самолюбие* の形をとって、全世代に入り込んだんですよ、まさしく悪魔がね」。ゴーゴリの悪魔が近代社会を支配しはじめた初期のものであるとすると、ドストエフスキイの悪魔はもうロシア全体に一子どもにまで—深く浸入してきている。

2.

ラキーチンは、ゴロソフケルの言うようなイワンの「反響体」に収まりきらない⁹⁾。イワンの話は相手次第で内容が異なる。神は存在しないと言ってみたり、時に「神よ！」と呼び掛けてみたり、—それは話す相手によって内容を大きく変えるという以上に、イワン自身が、神を信じていると同時に信じていないというどっちつかずの二重の考えを持っていたためだろう。神だけではない。自身が導き出したイデーですら、彼は信じることができない。一方ラキーチンは信じるもなにも、人類だの、理想なんてものはそもそも、人をあやつるための口先だけのものでしかない。

イワンもラキーチンも「すべては許されている」という公理をふりまわすが、イワンはラキーチンとは違い、自身の考えを絶対化できない苦悩を抱え込んでいる。ラキーチンは、「すべては許されているのか、何をしてもかまわないのか」というミーチャの問いに、こう答えている。「そんなことも知らなかったのか」、「賢い者は何でもできるのさ。賢い者はざりがにだって捕まえることができる¹⁰⁾ [抜け目がなく、ことに当たることができる]。きみなんかは人殺しをしたものの、どじを踏んで牢屋で朽ち果てることになるんだ！」（第 11 編第 4 章）。ラキーチンはイワンのように「真理」をめぐる頭を悩ませたりしない。

ラキーチンは同時に、矛盾する正反対のことをしても平気だが、イワン

は自身の中の矛盾に苦しみ揺れる。イワンの人格はついには割れて悪魔を生み出してしまいが、ラキーチンには絶対に分裂はない。イワンの半分が悪魔に乗っ取られるとすれば、ラキーチンは全体がもう最初から、乗っ取られている。

すでに述べたように、「すべては許されている」というイワンのイデーを示す公理には、さまざまな未定稿の「バージョン」がある。たとえば、積極的に悪を行うべきだという意味を込めたドミートリイの解釈も一つのバージョンとなる。定稿は完成していない。あるいはイワンに言わせれば、決定稿がないことによって、自分の絶対の自由意志が守られている、ということになるのだろうが、未決定のまま、イデーを持ちこたえることは落ち着かず、時に極度の不安と苦しみを生み出す。

この「バージョン」と一見似ているのが、〈頭のいい者にとっては、すべては許されている〉という留保付きのラキーチン流の公理である。これはしかし、ドミートリイのそのようにイワンの公理のバージョン違いではなく似て非なるもの、イワンの認定が得られないまったく別の公理もどきだ。イワン作の叙事詩「地質学的変動」では、前段で、全体として誇り高かったはずの人間は、後段では一転して、根っからの愚か者として登場する。そしてここでは、ただ一握りの賢者、例外的な「真理」の認識者だけに特権が付与され、彼らだけが人神となり、好き勝手に振舞うことが「許される」ことになる。この「真理」の認識者を卑俗化し、「頭のいい者」に置き換えると、ラキーチンの公理もどきになる。ラキーチンによれば、イワンの言う奴隷人たちを縛るのに、どんな道徳的障害もない人神とは、例外的な「真理」の認識者などではなく、彼のように何ごとにおいてもまわく立ち回る「頭のいい者」のことになる。ラキーチンからすれば、真理にふりまわされるのは「馬鹿」である。イワンのもとを訪れる悪魔が同じ考えをもっているのはおもしろい。— 『『すべては許される』、以上、終わりでせ！ どれもみんな実に結構なことで。ただ、いかさまをしようとしているのなら、なんでその上、真理の裁可なんぞが必要なんですかね？』(第11編第9章)。イワンの悪魔はただ、からかって、相手をいらつかせているだけであるが、ラキーチンは「真理」を「頭のよさ」に置き換えて、悪

魔の考えをすでに実践している。

ラキーチンによれば、「頭のよい者」は何より、平気で嘘がつくことを許されている。たとえば、グルーシェンカはきみの親戚ではなかったかとアリョーシャに問われ、ラキーチンは、「ぼくが売春婦のグルーシェンカの親戚であるはずないじゃないか」（第2編第7章）と突っぱねる。グルーシェンカとは親戚ではない、—これはもちろん、真つ赤な嘘である。ラキーチンの母親とグルーシェンカは、姉妹なのである。グルーシェンカは商人サムソーノフの囲い者だという噂が流布するなか、自分にとって都合が悪いと思われることは平気でごまかしたり、平気で嘘をついたりする。さらには「売春婦」などとひどい罵倒の言葉を浴びせていながらも、いとこのよしみで彼女のもとに通い、そこに入り浸っては遊ぶ金をせびっていた。同じ嘘つきでも、誠実な人間を装っているラキーチンは、自身を嘘つきと自称していたフォードル・カラマーゾフ以上に、たちが悪い。『白痴』に登場するフェルディシチェンコは、ものを盗んでも、「なぜあんなことをしでかしたのか、分からない」のだから断じて泥棒ではないと言いぬけようとした。ラキーチンは、本当は破廉恥な男であるのに、自分にはまったくその意識がなく、「テーブルの上の金を盗んだりしないと自覚しているという自信から、自分を最高度に正直な男とすっかり決め込んでいる」（第2編第8章）。自己を正当化することを第一義に考える彼らは、どんな悪事を働いても自分を責めることはない。

「イデー」も「哲学」もなく実利的に生きている点に限って言えば、ラキーチンは現代の多くの日本人に近いのかもしれない。ラキーチンは「笑いながら」、神なんかなくともわれわれは人類を愛することができると豪語する。彼に言わせれば、「市民権の拡張だとか、さもなきや、せめて牛肉の値段を上がらないように骨折って奔走すること」の方が、「哲学なんかに頼るよりも簡単に、手っ取り早く人類に愛を示すことができる」のだ。ラキーチンはこうした自身の主張を監獄のドミートリイに得々と話してきかせるのだが、ドミートリイはそんなラキーチンを、この男にとっては「生きるのは気楽なことだ」と嗤っている。

ラキーチンには、イワンをはじめとするカラマーゾフの兄弟に特有の「苦

悩」というものがない。彼にあるのは、言い訳できないところに追い込まれた時のばつの悪さなど、へまをした時の恥の意識だけだ。そして恥を感じると、とたんに周りの者にやつあたりをする。すでに触れたように、彼はグルーシェンカとの間で、アリョーシャをおびき寄せれば 25 ルーブルもらえるという取引をしていたが、そのことをアリョーシャ自身に知られてしまった時には、さすがにうろたえた。しかし、謝りもしないし、取り繕うこともない。ラキーチンは「羞恥を隠しながら」開き直って、そっちが悪いのだ言わんばかりに、アリョーシャを「馬鹿」に仕立て上げる。「これでどちらもまことに好都合ってわけだ。馬鹿は、頭のいい人間にもうけさせてくれるためにいるのさ」と（第7編第3章）。おそらくその顔には悪魔的な笑いが浮かんでいることだろう。

こんな破廉恥漢のラキーチンが生息できるのはもちろん、生息を許すような環境があるためである。ラキーチンをよしとする大勢の人々がいるから、彼は後押しされて出世の階段を上がってゆくことができる。処世術としてなにより助けになるのは、俗人の耳をくすぐる〈言葉〉である。「自由、平等、友愛」、「ヒューマニズム」、「市民的利益」、「有益な事業」、「傾向的」、「啓蒙的感情」といった類の当時の、進歩的な香りのする言葉を彼はしこたま仕込んでいるのだ。ラキーチンは、15万ルーブルの財産目当てにホフラコワ夫人に言い寄るけれども、金持の女をたらしこむことさえ、「有益な事業」のためだということになる。「馬鹿女から資本を巻き上げれば、その後は市民的利益をもたらすことができる」（第11編第4章）。ものは言いようだ、なにかしら聞こえがいい。ラキーチンの口を経ると、どんな悪事であっても、善事の装いにさまがわりする。お目当てのホフラコワ夫人がペルホーチンに横取りされるなど、時に工作がうまくゆかず受け入れられないことがあれば、今度は得意の大衆受けする〈言葉〉を武器に使って新聞に投稿し、匿名の批評で意趣返しすることを忘れない。『孤閨をかこつ』貴婦人の一人で、すでに成人した娘がいるにもかかわらず、若作りのさるご婦人などは、この男〔「農奴制支持者」の殺人犯ードミートリイ〕を誘惑するために、犯行のわずか2時間前に、今すぐ金鉢に駆け落ちしようと、3千ルーブルを申し出ていたほどだった」（第11編第2章）等々。

ラキーチンは自身の利益を考えて行動するが、時には気晴らしに子どもの教育にも携わる。彼はある意味、イワンと同じように、コバンザメを呼び寄せる指導者なのだ。その<大きさ>に惹かれて、弟子となったのが、13歳のコーリャ・クラソートキンである。コーリャがラキーチンと話している場面は直接、描かれているわけではないが、彼が友人仲間と話したり、アリョーシャと話したりするその言葉の端々から、ラキーチンの影が透けて見えている。

たとえばコーリャはキリストについて、こんなふうにあリョーシャに話した。「キリストはまったく人道的な人物だし、もし我々の時代に生きていたとすれば、すぐさま革命家に賛同し、ことによると重要な役割を演じていたかもしれませんね」（第10編第6章）。さらにコーリャは、同じことを「ベリンスキイ老人も言ったそうです」と、得々と付け加えている。36歳で亡くなったベリンスキイのことを「老人 старик」と呼ぶのはもちろん、彼の話そのものが—ラキーチンからの—あやふやな聞きかじりであることを示している¹¹⁾。このキリスト評を聞いたアリョーシャの、アリョーシャらしからぬ反応がおもしろい。彼は激して「いったい、どんなばか者とかかわり合いになったんです？」と尋ねるのだ。「ばか者 дурак」という罵言は、よほどのことがないかぎり、やさしいアリョーシャの口から出てこないだろう。これに対しコーリャは、「ラキーチンとはよく話をします」と、ラキーチンからいろいろと教えを受けている<ことをほのめかず。年少の友人には、人間の社会を見れば、人は犬よりも愚かである、という「注目すべき」思想もラキーチンから仕入れたと、彼は述べている。社会主義になって平等になり、皆が「共通の財産」を持てば、「結婚なんかなし、宗教とか、いっさいの法律とか、その他のことがすべて好き勝手になる」とコーリャはその友人に語っているが、これも<尊敬する>ラキーチンの受け売りだろう。「リアリズムを観察することが好き」だなどと奇妙な、もってまわった<知的>な言い回しを使ったり、「たとえばるかにたくさんとは言わぬまでも」というもったいぶった表現を<効果的に>繰り返したりするのもみな、ラキーチンの「指導」の賜物である。それだけではない。どうやらラキーチンは少年コーリャに、非合法の革命活動をし、そのあと

アメリカに逃亡したらいいとまで焚きつけたらしい。この人を唆すという点からすれば、ラキーチンは、『悪霊』の冷血漢のニヒリスト、ピョートル・ヴェルホーヴェンスキイにも似ている。ドストエフスキイは1873年の『作家の日記』で、こんなことを言っている。ピョートルは「ぼくは騙りで、社会主義者じゃない」と言うが、実際、「彼ら」はきわめて狡猾な騙りで、人間の魂、ことに青年の魂の「寛大な〔心の広さの〕方面」を研究しつくして、それを「楽器のごとくもてあそぶのである¹²⁾」と。ピョートルは人を騙しても、自分の行動は「自分には矛盾しない」と広言してやまない。この自分自身に矛盾しないという良心を抑え込む奇天烈な言葉は、賢いラキーチンの口からも出てきそうだ。

ラキーチンのコーリャへの働きかけは、生半可な知識のばらまきや、無責任な革命運動への唆しだけにあるのだけではない。コーリャは時折、せせら笑いを浮かべて自身の〈頭のよさ〉をひけらかし、自分以外のすべてのものを軽んじるが、その嘲笑的な態度にも、ラキーチンの影響がある。おそらく頭のよさを自負してやまないラキーチンには、血気にはやる早熟のコーリャを調教することが、気晴らしになっていたのだろう。そしてコーリャはラキーチンが自分を調教しようとしたように、自分に心服するイリュージャを教育しようと考えていた。イリュージャが「気に入っている」という理由で、彼の性格を「鍛え〔＝調教し〕、丸くし、人間を作ってやる」つもりだったのだ¹³⁾。

3.

『カラマーゾフの兄弟』という物語において、ラキーチンは孤立しているわけではない。ラキーチンを悪魔に見立てるならば、大悪魔のサタンではなく、滑稽な小者の「チョールト черт」という役どころだ。「チョールト」は物語の中で単独で行動しているわけではない。協力する別の、少し大物のチョールトがいる。小者のチョールトであるラキーチンとスクラムを組むのは、裁判で正義と深く係わる検事のイポリートと弁護人のフェチュコーヴィチだ。つまり、どちらの背後にもラキーチンが、あるいはラキーチン的なチョールトがいるのである。

検事はラキーチンの才能を大いに買い、ラキーチンが雑誌に載せるために書いたドミートリイの事件をめぐる評論を、事前に読ませてもらっていて、「いくつかの考え」を引用さえしている。検事がラキーチンから得たものは、彼が「観察者」としての捉えた、カラマーゾフ家の事情、さらにはドミートリイをはじめとするカラマーゾフ一家の個々人の性格である。ラキーチンが捻じ曲げたものはそのまま、検事の論告にも現れている。

一言でいえば、ラキーチン＝イポリト検事の描き出したカラマーゾフたちは、まるで標本のように、命が通っていない。マックス・ピカートは自著『人間とその顔』の中で、「観察者の立場に立つ人間」には「顔の素材、つまり生命の抜けたもの」しか見ることができないと述べている¹⁴が、「カラマーゾフ家の全員を間近で深く見つめてきた若き観察者」ラキーチンの言葉には、まったく精神性、魂というものが見られない。

検事はラキーチンの捏ねあげた美文を援用しながら、次のように述べている。『あの不羈奔放な気質にとっては、下劣な墮落の感覚と、気高い高潔さの感覚が、ともに同じように不可欠なのである』。—まさにこれは真実であります。彼らにとっては、この不自然な混合が間断なく必要とされるのです。二つの深淵です、みなさん、同時に二つの深淵です。これがなければ我々は不幸であり、満足できず、我々の存在は不十分なものになるのです。我々は広大です、広大なんです！ 我々はわが母なるロシアと同じように広大で、すべてを収容し、すべてと仲よくやって行けるのであります！」（第12編第6章。強調は筆者）。検事はラキーチンの考えをなぞりながら、「彼ら」と「我々」を同一視するという、まるで言い違えかと思えるような飛躍ぶりで（この「高尚な」飛躍ぶりもラキーチン的である）、<墮落した>ドミートリイが「あるがままのロシア」を表すという自身の「高尚な」意見につなげる。検事はラキーチンの作った物語<カラマーゾフの兄弟>を下敷きにして、そこにロシアを映し出すもう一つの『カラマーゾフの兄弟』を創作するのだ。

一方、弁護人の尋問に即興で答えなければならない時には、ラキーチンの美文はなりをひそめ、その言葉は露骨で、ほとんど罵倒に等しくなる。「あんな連中のだれが悪いかを判断したり、だれがだれに借金があるか勘

定したりするなんて、だれにもできっこないですよ。だれ一人、自分で自分の立場を理解することも、はっきりさせることもできない、でたらめなカラマーズフ気質ですからね」(第12編第2章)。ラキーチンたちや検事にとって、二つの「深淵」を同時に見るような「不羈奔放な」意味深遠のカラマーズフ気質は普段着の言葉でいえば、ただのばかばかしい「でたらめ」でしかないのだ。

証人たちの記憶はあいまいではあるが、あいまいなものでも数が増えるのと重みを増す。そして最終的にはそれらの「総和 **итог**」が大いにものを言う。こうした検事が寄りかかる「事実」の「総和」に対して弁護人は、弁論の前半、自身のクライアントが無罪だという前提に立って、一つ一つの証言に含まれる思い込みや意図的な歪曲などを明らかにし、検事が有罪へと導こうとした「事実」や心理分析がどれも、両刃の剣であることを例証してゆく。その緻密な観察力は検事を凌駕し、スメルジャコフが犯人である可能性はゼロでないことも彼によって明らかにされる。検事側が信じていた、スメルジャコフが知能薄弱であるという見方も覆されてしまう。結果、ドミートリイが犯人だとする絶対的な証拠はないのだから、疑わしきは罰せずの原則で、無罪にすべきだという結論になる。ここで終われば、読者に与える弁護人のイメージもまったく違ったものになっていただろう。しかし、彼の目指すのは非の打ちどころのない完璧な勝利であった。この完璧さの追求の中で、フェチュコーヴィチの新たな姿が浮き彫りになる。

フェチュコーヴィチは「すこぶる率直に、飾り気なしに、確信を持って」論告への反駁をはじめた。ところが例証の分析を終え、弁論の後半になると一転、態度も語調もまったく変わってしまう。彼は何か「新しい、情のこもった声で」語り始める。

大衆迎合的な美文を撒き散らしたラキーチンの陳述は、「思想の独自性と、その飛躍ぶりの並外れた高尚さで、傍聴人を夢中にさせた」が、後半のフェチュコーヴィチの「高尚な」言葉もラキーチンに劣らぬほど、傍聴人の胸に響く。聖句をあちらこちらに散りばめながら、時にラテン語までまじえたその話しぶりが「パセティックな調子」になると、「法廷はまるでそれを待ちかまえていたかのように、一体となって歓喜に打ち震えた」。フェチ

ユコーヴィチは予め、調子を劇変させる効果を頭の中でシミュレーションしていたにちがいない。すべては計算どおりなのである。

フェチュコーヴィチは声の調子ばかりではなく、もう、これまでの立場すら投げ捨ててしまう。前半は、一般的な殺人事件として「事実」の「総和」によって攻めてくる検事に、個々の事実を再検討して対抗したが、後半は、これが父親殺しという特殊な殺人事件であるとの認識から、事件へのアプローチの仕方をまったく変えてしまうのだ。これまではクライアントは殺人を犯さなかったと主張していたのが、一転、殺人を犯したという前提に立つ。

まず弁護人は、ドミートリイが殺人を犯したとしたら、それは抑制のきかない、野蛮で粗暴なドミートリイの性格が原因であるとし、責任は息子をそのような性格にしてしまった父親にあるとする。

検事は、たとえば錯乱した状態でのイワンの証言を、「家族的な愛着感情」からのものとして理解した。「家族的な愛着感情が不信仰によっても、また思想の真の苦悩というより、むしろ遺伝によって得られた道徳的なシニスムによっても、まだかき消されていないことを、我々は見たのであります」（第12編第6章）。つまり検事は、カラマーゾフの家族の絆がまだあるのだと言っているのだ。一方、弁護人のフェチュコーヴィチは、人間が本来的にもっていると言検事が言う「家族的愛着」を真っ向から否定する。それは所与として与えられているわけではない、証明できてはじめて有効なものとなるというのだ。父親らしいことを一度も子どもに行ってこなかった父親失格者は、殺されても仕方がない。だからたとえ殺しても、罪には問えないと言うのだ。

言葉を換えれば、悪い環境に育ち、その環境から悪い影響を受けた場合には、影響を受けた人間の責任は問えないということだ。フェチュコーヴィチの弁論の方法を支えているのは、まさに「彼は殺さずにはいられなかった。環境にむしばまれていたのである」というラキーチンの書こうとする「評論」が拠って立つ環境説である。ドストエフスキイによれば（1873年の『作家の日記』第2章）、人間は社会機構の誤りの一つ一つに左右されるとする「環境説」は、人間を道徳義務や自主性から解き放ち、最終的

には人間を忌まわしい奴隷状態に置くことになるという¹⁵⁾が、人間を<魂のないロボットとして見るのがラキーチンやフェチュコーヴィチの眼なのだろう。

ラキーチンは自身の<ドミートリイ殺人事件>を、「傾向」をもたせ、社会主義の「色合い」をつけることによって面白い読み物にするつもりであるが、弁護人は同じ環境説に立ちながら、<ドミートリイ殺人事件>は起こるべくして起こったものとし、そこから、クライアントの更生には陪審員たちの「慈悲」が必要だと情に訴えて、「赦し」を願い出る。「慈悲」や「赦し」といった言葉はキリスト教的な香りに包まれているが、ここでの「慈悲」や「赦し」は、実際のキリスト教とは異質なものである。

フェチュコーヴィチは、ただ箔を付けるためにキリスト教の権威を利用したにすぎない。彼は言う。「我々が現実生活の領域内で人道的になりたいなら、そして結局キリスト教徒でありたいなら、理性と経験によって正当化され、分析の試練を経た信念だけを実行する義務と責任があるのです」と。ラキーチンと同じように、フェチュコーヴィチにとっても、愛もやはり「分析の試練を経た信念」の一つなのだ。「無分別に行動するのではなく、理性的に行動せよ」と彼は呼びかける。「無分別に」は *безумно*、「理性的に」は *разумно*、どちらの語にも *ум* (=知) が組み入れられている。つまり、フェチュコーヴィチの主張もラキーチンの主張も、「賢い (知的な) *умный*」ことを最重要事項と認める点では変わらないということだ。

イポリート検事は「被告の有罪を心から信じていた」が、フェチュコーヴィチ弁護人も、ドミートリイの無罪を主張しているにもかかわらず、ドミートリイの言葉をそのまま信じているわけではない。実際、ドミートリイは刑務所で面会に来たアリョーシャに、フェチュコーヴィチのことをこうぼしている。「何が弁護士だ！ 俺は奴にぜんぶ話してやったんだぜ。もの柔らかなペテン師だよ、都ふうのな。あれも [ラキーチンと同じ] ベルナルさ！ もう俺の話をもるつきり信じないんだ。あきれたことに、俺が殺したと本気で思ってやがるんだからな。俺にや分かるさ。『だったらなぜ、俺の弁護をしにやってきたのか』って訊いてやったよ。どうなとなれさ。」(第11編第4章)。弁護人は自分が「無実を確信している」か、予

め「無実の予感がする」被告だからこそ、弁護を引き受け、わざわざ都からやってきたのだと言うが、この「無実 невинность」という言葉の意味は、たとえ犯罪を犯していても、情状酌量で<罰なし>の判決を勝ち得る可能性があるということなのだ。

フェチュコーヴィチにとっては、真実の追求などはどうでもいい。ただ、自身の語ることが陪審員に真理であるように見えることが重要なのだ。彼は、父に愛されない子どもの言い分を故意に、生々しい<直接話法>を使ってこう伝える。「おれを生んだ父が、そのあと一生涯おれを愛してくれなかったら、そのためにどうしておれが愛さなくてはならないんだ」（12編第8章）。「父よ、証明してください、わたしがあなたを愛さなければならないことを」（同上）。

愛するためには理由があるとフェチュコーヴィチは考えているが、同じような考えをラキーチンも持っていた。第7編第3章、アリョーシャがラキーチンの誘いでグルーシェンカの家を訪問する場面を思い起こそう。あんたは私たち（グルーシェンカとアリョーシャ）を愛してないと、グルーシェンカに言われると、ラキーチンはむっとしてこう答えた。「人が愛するには何か理由が要るけれど、あんたがたはぼくに何をしてくれたんだい」。それに対してグルーシェンカはこう返す。—「理由なんかなくても愛なさい。ほら、アリョーシャのようにね」。しかし、ラキーチンは、グルーシェンカの言うことがまったく理解できず、「君が夢中になるような何かを、彼は見せてくれたのか」と、どこまでも理由の説明を求める……。弁護人は父が子を愛さなければならない「証明」を求め、ラキーチンは、アリョーシャがグルーシェンカを愛するようになった根拠を示せと迫る。ラキーチンもフェチュコーヴィチも、近しい人間の繊細な感情や感覚を理解する能力に欠けているのか、あるいはその手の問題に関してはおそろしく<耳が遠い>のだ。

フェチュコーヴィチによれば、子が育った家庭が、「理性的で、自覚的で、厳密に人道的な基礎」の上に築かれた「正常な真の家庭」であると証明できなければ、子は父をそれ以後、親を他人と見なし、さらには敵とさえ見なす「自由と権利」を手に入れるのだという。場合によっては、殺す権利

だって彼は認める。要するに、父であることが証明できなければ、子は父に従う義務はなく、殺害を含め「すべてが許される」というのである¹⁶⁾。一ここでいう〈父〉(あるいは父世代)は権力、秩序を維持している者という意味合いを含みこんでいる。証明されない権威は倒してもいいとなると、『悪霊』で展開されたように、父(あるいは父世代)への子(あるいは子世代)の反逆というテーマから、「新しい人間」の登場、暴力的な革命思想にも発展してゆく。父が倒されたあとには、「すべてが許された」一種のアナーキーな状態が現出する。イワンやラキーチン、フェチュコーヴィチたちを政治的な文脈におけば、社会の秩序、権威から自由なアナーキストということになろう。これは、ラキーチンに唆されたコーリャが、「すべて好き勝手になる」社会をめざそうとしていたこととも関係する。

陪審員の信頼を得て無罪判決を勝ち得るために、フェチュコーヴィチは「必要に応じて」、聖書の言葉を引用する。ただの権威づけの引用ではない。彼は自身の言葉を正当化するために、聖句を故意に捻じ曲げて使うのだ。

最初に利用するのは、「ヨハネによる福音書」第10章の一節である。「磔にされた博愛の人は、十字架にかけられることを覚悟の上で、『我はよき牧者なり。よき牧者は、羊のために命を捨てる。されば羊一匹、滅びることはない』と言われたのです。我々だって人間の魂を滅ぼさないようにしましょう！」(第12編第13章)。

我々も「よき牧者」として「人間の魂を滅ぼさないように」しよう……。なにか奇妙である。これでは「我々」は、キリストの言う「わたしに従って来る者」(=羊)ではなく、裁く者としてキリスト(=「よき牧者」と同格に並んでしまっただろう。このような自己の神格化は傲慢の極みである。あるいはキリストを「博愛の人」と置き換えているところからすれば、キリストを自分たちのところまで引きずりおろしたとも考えられる。いずれにせよ、これは、検事がいみじくも指摘したように、「理性と健全なる常識の演壇」(ヒューマニズム)からの「神の福音書」の「修正」に他ならない。どうやら弁護人が持ち上げるキリスト教は、「理性と健全なる常識の分析」に耐えうるような、「神秘」の入り込む余地のないつまりもはや宗教ではない—「キリスト教」なのである。イワンの創作した大審問官はキリスト

に向かって、「我々はあくまでもおまえに従順であり、おまえの名において支配しているのだ」（第5編第5章）と告白する。しかし大審問官が真に崇めているのはキリストではなく、「賢い精霊」、すなわち悪魔であった。フェチュコーヴィチも大審問官と同じく、ただ人々の心をつなぎとめておくために、キリストの権威を戦略的に利用する。おそらく彼の背後にも「賢い精霊」がいるのだろう。

弁護人はさらに、「コロサイ人への手紙」第3章の一節、「父たる者よ、汝の子どもを悲しませるな」を援用する。この引用だけでは、まるで父親を特別扱いしているように見えるが、実際にはここでは夫、妻などに並べて、子どもの項目もあり、そこには、「子どもは両親にしたがえ」と記されている。あえてそのことに触れないのは、自身の主張に合わなかったからだろう。昔、ギリシャのプロクルステスという追いはぎは、捕らえた旅人を寝台に寝かせ、その寝台に合わせ、体が短すぎると槌でたたいて引き延ばし、長すぎると、はみ出た分を切り落としたというが、弁護人もその伝で、自分の主張に合うように聖書を延ばしたり、切り落としたりするのである。

聖句引用の最後は、「秤をもって人に量らば、そのごとく汝らにも量られん *В ню же меру мерите, возмерится и вам.*」という「マタイ福音書」第7章の一節である。これは、こちらが裁いたと同じように裁き返されるという、裁きのブーメラン現象を示したものだが、弁護人はその現象を権利の問題に置き換える。そして、「子どもたちが我々と同じ秤で量ったからといって、どうして彼らを非難できるでしょうか」（第12編第8章）と訴えるのである。

ここでの問題は、「量られる〔量りかえされる〕」という言葉をいかに解釈するかにある。ふつうならば、だから相手と同じ秤で量ってはいけないという禁止の意味にとるだろう。しかし、検事も指摘するように、弁護人はこの箇所を、「キリストは、あなたが量られた同じその量りで量れと説いた」と解釈した、つまりやられたら、やりかえせと解釈したのである。弁護人は「必要に応じて」、あえてオリジナルを歪曲している。彼は「最近のプログレス」と「発達」を持ち出して現代人としての誇りをくすぐり、人

間が進化したことを口実に、「神秘的な偏見」を捨てよ、大胆不敵になればと聴衆を励ます。キリストを信じるゾシマたちから見れば、その励ましはまさに悪魔の誘惑であろう。

この聖句に言及するのはフェチュコーヴィチだけではない。じつはフォードル・カラマーゾフも同じ一節に言及していた。「私は頭のいい人間の味方だ。我々は大いなる賢明さから百姓たちを殴るのをやめたが、その当の百姓たち自身が、自分で自分を鞭打ち続けている。よくできたものさ。同じ秤で量られ、同じ秤で量りかえされる、だったかな。要するに、量りかえされるってことだ」(第3編第8章)。酔っぱらってしどろもどろの引用で、その解釈は<頭の悪い>ロシアの百姓に対する悪意にみちたものだが、それでもフォードルは、「量りかえされる **возмерится**」ことを、「量りかえせ」と読み替えるような、聖句の意味を変えるほどの大きな歪曲は行っていない。彼にとっては引用はいわば、傍観者としての遊び、コニヤックをやりながらの頭の体操でしかなかった。まさかこの一節が、自分と同じ「頭のいい人間の味方」によって彼自身に適用され、「量りかえされる」当の例になるなどとは、思いも及ばなかっただろう。

フェチュコーヴィチが振り回すのは報復を是とする論理、子が父を裁く権利である。この父を裁くというモチーフは、イワン・カラマーゾフとも無縁ではない。イワンは、人々を(わけても自分を)苦しめた者への「報復 **возмездие**」が天上ではなく、地上で実現されることを強く求めている¹⁷⁾。フェチュコーヴィチも同種の報復をよしとする。やられたこととやり返すこと、それぞれの<重量>を量った時に、そこには常に釣り合いとれていなければならない、帳尻が合わないといけない。ギブ・アンド・テイクで、お互いさまであるはずだという<理性的判断>がここにはある。

こうして父親殺しを理詰めで正当化したうえで、フェチュコーヴィチは今度は別の面から、ドミートリイを擁護する。たとえ彼が凶行に及んだとしても、それは、子どもの頃から抱いていた「憎しみの感情」が「思わず抑えきれぬ力で彼を捕らえ、判断ができなくなった」ためにほかならぬと主張するのだ。そして、この一瞬の「狂気と錯乱による心喪失 [アフェクト]」あるいは狂気に近い「偏執狂 [マニア]」に対しては、被告人に

責任を問えないと結論づける。弁護人に言わせれば、この「心神喪失」は自然の事象でもある。「自然におけるあらゆるものと同じく、抑えきれぬ力で無意識のうちに、自己の永遠の法則に対する復讐を叫ぶ、自然の心神喪失なのです」（第15編第13章）。「自己の永遠の法則に対する復讐」とはまた高尚めかした、持って回った表現だが、要するに、しかたがなかった、理性とは無関係なところにある自然であれば、人間の責任も罪もないということだ。

念には念をとということだろうか、弁護人は<情状酌量の>無罪の判決を勝ち取るためのダメ押しとして、最後に「慈愛」の必要性を説く。たとえドミートリイがほんとうに親を殺したとしても、その罪を赦してやれというのだ。この赦しは、ゾシマがたえず口にする赦しとは似ても似つかぬものである。ゾシマにあっては、人が誰かの裁き手になるには条件がいる。つまり、裁き手自身が、目の前に立つ罪人と同じ罪人なのであって、その人間の罪に対し、「他の誰よりも責めを負うべきであるということ」を自覚しなければならぬ。一方、フェチュコーヴィチには、ゾシマの言う裁き手の罪意識など、問題にならない。フェチュコーヴィチによれば、裁き手がもし温情をかけて無罪にしてやれば、被告人は感謝し、もうそれだけで更生する。しかし有罪にすれば、相手は、自分はたしかに罪を犯したが、裁く側も流刑という罰を下す以外に、何もよいことはしてくれなかった、だからこれで「おあいこだ〔清算した сквитался〕」と考えるという。自分を憎むなら、自分だってあなた方を憎む「権利」があるというわけだ。弁護人はなにやらここでも、量る者は、同じ秤で量られると言いたげだ。

4.

量る者は、同じ秤で量られる。フェチュコーヴィチにあっては、量る秤の傾き具合が問題になる。しかし「秤をもって人に量らば、そのごとく汝らにも量られん」という福音書の一節が真に問題にしているのは、同じように「量りかえされる」ということ、つまりは量り方の問題であろう。この量り方を実際の裁判に置き換えると、量り方は裁き方と同じ意味になる。裁判所は誤った判決を下したが、このことによって裁判そのものが裁かれ

ているのである。フョードル殺害をめぐるイワンの教唆、スメルジャコフの殺害実行、ドミートリイの誤認逮捕にいたるまでの主要なストーリー展開は第12編では、すでに終わっている。にもかかわらず、事件のおさらりとなる裁判の過程が新鮮なものになりうるのは、この裁き・裁かれるという関係に焦点が当てられているからにほかならない。

第12編で扱われているのはなにより「冤罪」の問題である。もっと拡げて言えば誤った「裁き」、あるいは事実そのものの誤った解釈・批評の問題である。『カラマーゾフの兄弟』の焦点はフョードル殺害をめぐる話から、誤審という最悪の結果をもたらすことになった話についての話、裁きのシステムそのものに移行する。人が人を裁くとはどういうことなのか、その問題が、ここで新たに見据えられることになる。

すでに触れたように、弁護人の論じ方は論理で突き詰める前半と情に訴える後半では、まったくちがっている。通常ならば、情に走ったような文章は知的ではないが、どうやら弁護人はここにも「知（賢さ）」のレッテルを貼りたいらしい。ここで「知（賢さ）」を後押しするのは、自身の利益である。「理由なんかなくても愛しなさい」というグルーシェンカの言葉にはすでに言及したが、ラキーチンが執拗に「理由」を求めたのは、結局のところ、どんな場合でもことの良しあしを自身の利益の有無でしか判断できないからだろう。自身の利益なしに物事を考えられないのがラキーチンだが、どうやらフェチュコーヴィチの頭にも、利益が頭の中の釘にひっかかって離れないらしい。たとえば彼はラキーチンが出版した『身罷りしゾシマ長老の生涯』に関して、こう言っている。「ああ、あれはすばらしい！ あなたのような思想家なら、社会のあらゆる現象にきわめて広範に対処できるでしょうし、また当然そうすべきですよ。あなたのきわめて有益なパンフレットは、長老様のご加護によってとても売れ行きがよく、けっこうな利益を得ることができましたからね……」（第12編第2章）。弁護人はどうしてこれほどまでに利益にこだわるのだろうか。本が有益で、よく読まれているという言い方ならばさして違和感はないが、どれほどもうけたかなどということまではふつう、言及しないだろう。どうやら「けっこうな利益」というのは弁護人個人の強い関心事でもあるのだ。「けっこうな」利

益とは何も金銭的なことに限らない。国中で話題になった裁判で個人的名声を得ることも垂涎的となる。名声を含めて、「けっこうな」利益を得られると見込んだからこそ、フェチュコーヴィチもはるばるペテルブルグから田舎町まで足を運んだのだ。

弁護士としてフェチュコーヴィチは、職業的なテクニックを身につけている。無関係なことで相手を持ち上げ油断させておいて、いきなり痛いところを突く、というのもおそらく、尋問の常套テクニックなのだろう。『罪と罰』のポルフィーリイ判事が犯人の心理を読んだり、罠を仕掛けたりして犯人を追い込むことに喜びを感じていたように、フェチュコーヴィチ弁護士も、無罪を勝ち取るために策を練るのが楽しくてしかたがないようだ。ポルフィーリイやフェチュコーヴィチは生きた人間には興味はない。ポルフィーリイにとってはラスコーリニコフの生き死になんてたいした問題ではなかった。自分が想定したことが正しいと立証されれば、それ以上の関心はない。フェチュコーヴィチにとっても、ドミートリイが真犯人かどうかなんてどうだっていい。彼らにとっては事件はいつも、勝利をめざすゲームで、それ以上のものではない。弁護人にとってゲームの勝敗は、陪審員の「判決」で決定する。真実や正義は、陪審員の心証をうかがうための雄弁術の問題になる。この雄弁術を駆使し、被告人を追い込むのが検事で、クライアントの益に沿うようにするのが弁護人である。イポリート検事は頭のキレはさほどよくはなくても、ひたすらドミートリイは有罪だと確信して、自分なりに真剣に論理を構築する。ところが弁護人フェチュコーヴィチにとっては、クライアントが殺人を犯していようがまいが、結果的に無罪の判決を勝ち取ればそれで十分だ。心理戦・頭脳戦を制すればそれでいいのだ。なにより舞台<効果>を存分に使って自身の利益を増大させることができれば、目的は達成される。

ラキーチンは聖者伝としてゾシマ長老の伝記を著し、同時にもう一方で、当時流行の環境説を援用して、当該殺人事件を扱った社会評論も手がける。このように信じてもないものを持ち上げたり、共存できないはずのものをむりやり共存させたりするところにラキーチンのラキーチンらしさがあったとすれば、フェチュコーヴィチにもまた、ラキーチンのようなところがあ

る。フェチュコーヴィチもまた、自身の利益を生み出すためには手段を選ばない。何もかも総動員だ。理想もイデーも偽装されるし、心神耗弱という医師の精神鑑定もクライアントを有利にするためには、切り札として利用する。弁護人フェチュコーヴィチは自身のクライアントの有罪を確信しながら無罪を勝ち取ろうと、白を黒と言いくるめる「思想の姦通者」である¹⁸⁾。ドミートリイがラキーチンを評した言葉を用いて言えば、フョチュコーヴィチには「哲学」がない。

すべては聡明さのなせる戦術である。傍聴人の一人が言ったように、今日彼は「荷馬車」を「戦車」に仕立てあげたが、明日になれば、「戦車」を「荷馬車」に仕立てるだろう。プリンシプルがないので、「必要に応じて」何でもできる。依頼人の利益第一であると見せかけはするが、それ以上に、有名になろうという意欲が半端ではない。「この席にいる間、わたしは与えられた時を使わせていただきます。この演壇が至高の意志によって与えられたのも、訳があつてのことで、この演壇から発せられる我々の言葉は全ロシアに聞こえているのであります。ここにおられる父親だけに話しているのではなく、世のすべての父親に向かって、『父親たちよ、自身の子らを悲しませるな！』と叫ぶのであります」（第12編第8章）。実際、フョードル・カラマーゾフ殺人事件は全ロシア的な評判になり、ロシア中の様々な町から傍聴人が押し寄せてきている。これを見逃す手はない。フェチュコーヴィチは、あたかも自身がキリストになったかのように、広く「全ロシア」に向けて自説を開陳する。フェチュコーヴィチ Фетюкович はまさに言葉を膨らませるだけの「フェチューク」（фетюк=阿呆）であった。

「フェチューク」は自身の弁論をこんな雄弁で締め括る。「わたしのクライアントの運命はあなた方の手のうちにあるのです。わがロシアの^{ブラッダ}真実の運命も、あなた方の手のうちにあるのです。あなた方がそれを救い、それを守り抜いてくださり、守るべき者がいるということ、真実が善き人々の手のうちにあることを、証明してくださるのです！」（第12編第14章）。陪審員の〈権力者〉特有の心理を見通しての、巧妙なくすぐりのテクニクがここにはある。陪審員たちは、しがない自分たちがロシアの運命を左右する力をもっているような錯覚に陥ったのではないか。

しかし、陪審員たちはフェチュコーヴィチの誘惑を斥けた。「強奪の目的で計画的に殺害したのであるか」という問いに対して、「陪審委員長」（最も若い官吏）ははっきりと、「はい、有罪であります」と答えた。いささかの情状酌量もなかった。

なぜ、陪審員はドミートリイを有罪にしたのか。すでに触れたように、少なくとも、検事論告を検証する弁護人の批判的弁論（前半）からは、ドミートリイは無罪とは言わぬまでも、無罪の可能性があることがはっきりと示されていた。陪審員たちにもそのぐらいのことはわからないはずはない。ではいったい、彼らは何を思ってドミートリイをシベリア送りにしたのか。自分たちの心証である。小難しい証拠、証言の真実性の判定よりも、羽振りのいい貴族の転落の物語のほうが、ずっと憂さ晴らしになる。貧しい僧侶の出のラキーチンがカラマーゾフ家の人間をお坊ちゃんとして嫌うのは、彼らもっているその、生まれながらに与えられた貴族としての特権的境遇にある。陪審員たちは、官吏にしろ、商人にしろ、百姓にしろ、みな、何千ルーブルの金をやりとりする貴族たちとは違い、うだつの上がらない生活を送っていた。あるいはドミートリイを有罪にしたのは、裁判以前から陪審員のうちにはびこっていた<ラキーチン的な>嫉妬心ではなかったか¹⁹⁾。

ドミートリイ自身は、父の死に関しては無実だと主張し、さらには、自分は「卑劣漢であっても、泥棒ではない」と、金の強奪も否定する。しかしみんなはそれを信じない。検事はもちろん、本来クライアントの言葉に信を置いて弁護を引き受けるはずのフェチュコーヴィチですら、信じていない。実の弟のイワンさえ、スメルジャコフの口から直接、自分が犯人だと告白されるまで、ドミートリイを信じてはいなかった。ドミートリイの無実を信じるのができたのは、アリョーシャとグルーシェンカだけである²⁰⁾。

数ある証拠に対抗するものに、印象から導き出された信念がある。検事が積み上げた細かな証拠の「総和」に対して真っ向から対立するもの、—それは、両刃の剣となる心理分析ではなく、個が信じる「言葉」や「顔」であった。ドミートリイの逮捕時にグルーシェンカは、自分が悪い、自分

もいっしょに懲役に行くと叫んだが、そのことを検事に追及されると、彼女はこう答える。ドミートリイ逮捕時には、自分が原因で、彼が父を殺害したと思ったが、彼自身が自分は無実だと断言したので、即座にそれを信じました、と。「嘘を言うような人ではない」というのが、その理由である。またアリョーシャは、「わたしは彼〔ドミートリイ〕がわたしに嘘をついていないということを、彼の顔でわかりました」と述べている（第12編第4章）。グルーシェンカの〈確信〉は、元の考えを変えたことで疑いの目で見られる。また「顔」に頼ったアリョーシャの〈証言〉も、「実の弟による道義的確信のようなもの」として、それはそれでしごく当然のものであると見なされてしまった。「数学的」明白さがあるというドミートリイの記した犯行予告の手紙に比べれば、二人の言葉はともに、まったく信用できるものではないというのである。しかし、結果的にみれば、グルーシェンカとアリョーシャの〈証言〉のほうが真実を語っていたのだ。

もちろん、誰もが言葉や顔から真実を読みとることができるわけではない。特に顔からは難しい……。「自分の目を高く買っていた」ミウソフは、ゾシマ長老の小さな目や細い唇、鳥の嘴のような鼻などの、あらゆる「特徴」を総合して、ゾシマは「意地悪で底が浅く、高慢な心の持ち主」であると断じた。おそらく検事も弁護人も、陪審員もみな、ミウソフと同じ損なわれた「目」しかもっていないのだろう。総じて静的に、部分の集合として顔を見るミウソフたちには、心と連関した全体の動きを感じ取る能力に欠けている。アリョーシャによれば、ゾシマはよく、「愛することに不慣れな多くの人には、人間の顔は妨げとなる」と語っていたという。表情筋の微妙な動きを読みとることのできないミウソフやラキーチンあるいは、ラキーチン化した検事や弁護人たちは、抽象的な「人類」は愛せても、具体的な、個としての人間を愛することはないのだろう。

ドミートリイに対して裁判所は〈法〉に則り、間違った裁きを与えたが、その裁きに従うか従わないかの選択が、もう一つの裁きの問題になる。ソクラテスは悪法でも法は法だと言って、判決を受け入れ死んでいったが、ドミートリイの場合は間違った〈法〉よりも審級の高い裁きが問題となる。具体的にはそれは、無実の彼が移送される途中で脱走するというこの是

非として示されるのだが、ドミートリイが公判前に、この問題の「裁判官」になってくれるようにアリョーシャに依頼しているのは興味深い。公判後、この脱走に関して出したアリョーシャの判決は無罪。イワンの推測とは異なり（脱走を勧めるイワンはアリョーシャが良心となって、計画中止になることを恐れていたという）、アリョーシャの裁きは、無実な兄にとって20年のシベリア流刑という「十字架」は「あまりにも重すぎる」というものであった。脱走にかかわる将校や兵卒を一人として傷つけることはないとわかっていても、賄賂を渡して逃亡するということはまちがいでなく、法を犯す行為である。ところが驚くべきことに、アリョーシャは、その法律違反に対して、無罪の判決を下すのだ。これは裁判という形はとらないが、冤罪をもたらした形式的な裁きに対比されるもう一つの生きた裁きであることはまちがいない。

アリョーシャの<裁き>は人を生かす。ことさらに神を愚弄する父フォードルに対して、アリョーシャは怒ることなく、「お父さんは頭より心の方が立派です」と正直に告げる。広い意味では、これも一種の裁きだろう。このような嘘のない裁きが、自称「嘘の父」（悪魔の別称）のフォードルに及ぼした影響はけっして小さくはない。「アリョーシャの帰郷は、〔危機的状況にある〕彼に対し、いわば精神面からも影響を及ぼしたようで、年より早く老け込んだ老人の魂の中で、ずっと以前からもう消えかけていた何かが目覚めたかのようであった」（第1編第4章）。アリョーシャが係わる同種の事例は多い。イワンが自作の大審問官物語を聞かせるのも、グルーシェンカが過去に自分を棄てた男を赦すべきかどうかと尋ねるのも、ともにアリョーシャの裁きを仰いでいるのだ²¹⁾。言葉だけではない。アリョーシャの存在そのものが、生きた裁きになっている。となると、アリョーシャがラキーチンと絶交した意味も、改めて問われることになるだろう。

『カラマーゾフの兄弟』の序文で作者は、本作の主人公であるアリョーシャは「変人」、「風変わりな人間」とであると紹介している。作者によれば、「変人」とは『『かならずしも』特殊で孤立した現象とは限らない」。それどころかむしろ反対に、「変人のほうに時として全体の核心が保たれており、同時代の他の人たちは、みんな漂う風か何かで、一時その変人から遊離し

た、という場合だってあるかもしれない」。あるいはドストエフスキイはアリョーシャに、危険な変人として襟にされたキリストのイメージを重ねあわせようとしているのではないか。そうなると、フォードルやイワンだけではなく、裁判に象徴される地上の裁きのシステムの在り方もまた「賢い精霊」の指示であると見なされ、アリョーシャの中のキリスト的なものによって裁かれていることになる。

注

- 1) セルゲイ・フーデリ、糸川紘一訳『ドストエフスキイの遺産』群像社、2006年、124頁。
- 2) *Достоевский Ф.М.* Полн. соб. соч. в 30 томах. «Наука». Л.,1976. Стр.100.『カラマーゾフの兄弟』のテキストには、本全集14巻、15巻を用いた（以下、同全集を『ドストエフスキイ30巻全集』と略す）。
- 3) ラキーチンが出版した冊子の原題は「Житие в бозе почившего старца отца Зосимья」であり、アリョーシャが編纂したノートの原題は「Из жития в бозе преставившегося иеросхимонаха старца отца Зосимья」である。同一はまずいので、ほんの少し手を加えたというところか。
- 4) *Розанов В.В.* Мысли о литературе. «Современник». М., 1989. Стр.202.
- 5) ミハイル・バフチン、望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキイの詩学』ちくま学芸文庫、265頁を参照。
- 6) 中村健之介『ドストエフスキイ人物事典』講談社、2011年、509頁を参照。
- 7) Belknap R.L. *Structure of THE BROTHERS KARMAZOV*. Northwestern University Press. Evanston, Illinois, 1989. P.30.
- 8) *Гоголь Н. В.* Полное собрание сочинений в 14 томах. Т.8. АН СССР. М., 1952. Стр.415.
- 9) ゴロソフケル、木下豊房訳『ドストエフスキイとカントー『カラマーゾフの兄弟』を読む』みすず書房、1988年、72頁を参照。
- 10) この「ざりがに **рак**」をめぐる慣用句が、抜け目ない「ざりがに男」**Ракигин**（ラキーチン）の語源だろう。
- 11) ちなみに1873年の『作家の日記』では、コーリヤが語っているようなことをドストエフスキイ自身が、ベリンスキイから直接聞いたと回想している（『ドストエフスキイ30巻全集』第21巻、11頁）。
- 12) 『ドストエフスキイ30巻全集』第21巻、129頁。
- 13) ただ、子どもの性格はやわらかく、よい方向にも変わりうる。コーリヤがアリョーシャと触れ合うことで新たな顔を見せることについては、拙稿「ドストエフスキイにおける子ども」—『カラマーゾフの兄弟』論（海上保安大学校「研究報告」第52巻第2号、2008年3月）で詳述している。
- 14) マックス・ピカート、佐野利勝訳『人間とその顔』みすず書房、1959年、7頁を

参照。

- 15) 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 21 卷、16 頁を参照。
- 16) <～が証明できれば、～の自由と権利を得る>というのは、ドストエフスキイの主人公ではラスコーニコフ以来の考え方で、ドストエフスキイはそこにロシアに流入してきた西欧合理主義の典型的思考を見たのだろう。
- 17) チジェフスキイは、傲慢なドミートリイもフョードルについて「裁く権利」があると見做していると指摘したが、これは一面的であると言わざるをえない。少なくとも、ドミートリイは、フョードルが死んでしまうと、これまでとは「違ったふう」に考える。См.: *Чижевский Д. И.* Шиллер и «Братья Карамазовы» – В кн.: Достоевский. Материалы и исследования (19). «Наука». Санкт-Петербург, 2010. Стр.36.
- 18) ドストエフスキイは、当時流行したこの言葉（「思想の姦通者 прелюбодей мысли」）を第 12 編第 13 章の標題に用いている。
- 19) ロシアでは陪審員制度は 1864 年に導入された。ドストエフスキイはロシアの陪審員に特別、醜悪な「独裁者意識」を感じとっていたが、その原因は、制度を自分で創案せずに「贈物」として受け入れたことにある（1873 年の『作家の日記』、『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 21 卷、13 頁を参照）。また、ロシアに陪審制度が樹立された頃、彼は、「昨日まで農奴であった百姓たち」がほとんどを占めている陪審員たちの心中を、こんなふう上空想してみたことがあった。「どんなもんだい、今はもう、その気になりゃ無罪だし、そうでなけりゃ、シベリアへ直行だ」（同頁）。
- 20) カテリーナも無実だと信じていたが、愛するイワンの錯乱を目の当たりにすると、彼女はイワンのために、ドミートリイは有罪だという証拠を法廷に提出する。その時にはたとえその場限りではあっても、彼女はドミートリイの有罪性を信じていた。
- 21) 同じ問題でグルーシェンカは、ラキーチンには「わたしを裁くのはあんたじゃない не тебе меня судить」と言っている。彼女を「裁く」ことができるのはアリョーシャだけなのだ。